

6. 生活科論文

夢や目標をもち、共にみがき高め合う子どもの育成Ⅱ

自立していく喜びを実感する子どもの育成

～人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラムの創造～



I 研究の目的	73
1 研究の背景	73
2 研究の方向	73
II 研究内容	74
1 自立していく喜びを実感する子どもとは	74
2 人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラムの創造の基本的な考え方	75
3 人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラムの全体構想	76
(1) 子どものストーリー性（子どもの思いや願いの連続）に着目した年間指導計画の見直し	76
(2) 自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実	76
(3) 伝え合い交流する活動の充実	77
(4) 生活に必要な習慣・技能の段階的な育成	77
4 人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラムの具体化	78
(1) 子どものストーリー性（子どもの思いや願いの連続）に着目した年間指導計画の見直し	78
(2) 自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実	78
(3) 伝え合い交流する活動の充実	79
(4) 生活に必要な習慣・技能の段階的な育成	79
III 研究の実際	80
1 実践の立場	80
第1学年 単元：つくって あそんで	
2 生活科 第1学年 年間指導計画	81
3 実践の結果と考察	82
IV 研究の成果と課題	84
1 研究の成果	84
2 研究の課題	84

【学校教育目標】

夢や目標をもち、共にみがき高め合う子どもの育成 【校訓】 まことの子・ちからの子・のぞみの子

【目指す子ども像】

(知) 互いの考えに学び合う子ども (徳) 心と心がひびき合う子ども (体) 心と体をきたえ合う子ども

【本校の主な教育課題】

確かな学力の面から ○論理的な思考 ○伝え合う方法の習得 ○学ぶ喜びや楽しさの実感	豊かな心の面から ○人間関係(他者意識) ○自己の発揮の仕方 ○多様な体験	健やかな体の面から ○基礎体力 ○生活習慣 ○健康・安全
---	---	---------------------------------

【確かな学力、豊かな心、健やかな体を調和的にはぐくむカリキュラム】

		健やかな体をはぐくむ観点(体)													
		豊かな心をはぐくむ観点(徳)													
確かな学力をはぐくむ観点(知)		国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国活動	総合	特活	複式
		カリキュラム創造の視点	枠組	学校のライフスタイルの見直し											
カリキュラム創造の視点	内容	道徳教育の充実													
		伝統や文化に関する教育の充実													
		理数教育の充実													
		外国語教育の充実													
		方法	言語活動の充実												
	体験活動の充実														



具体的な活動が前提となる生活科において、体験活動の充実は何よりも重視されなければならない。つまり、具体的な活動を通して自立への基礎を養うために、確かな学力に関わる「学習上の自立」、豊かな心に関わる「精神的な自立」、健やかな体に関わる「生活上の自立」は密接に関係してくると考える。

子どものストーリー性に着目した年間指導計画の見直し
・ 各教科、道徳、幼小連携、生活科1・2年における同内容単元の設定

道徳的価値や要素を視野に入れ、学習の中で指導したり、生活科の活動や体験をきっかけとして、道徳の時間で効果的に学習できるようにしたりしていく場の設定

自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実
・ 自然の不思議さや面白さを実感する学習内容の設定
・ 自然・動植物愛の育成をめざし道徳教育との関連を図る。

伝え合い交流する活動の充実
・ 対象への気付きを深める伝え合い交流する場の設定
・ 自分自身への気付きを深める伝え合い交流する場の設定

生活に必要な習慣・技能の段階的な育成
・ 2年間を見通し、学習活動の設定
・ 他教科との関連を図った、合科的な学習指導の設定

I 研究の目的

1 研究の背景

生活科の新設から20年を経た今、知識基盤社会を迎え、社会の構造的な変化に対応する資質や能力および態度が求められており、次代に必要な資質・能力として「生きる力」の育成が求められている。

「生きる力」の基本となる『自立への基礎』を養う生活科においては、思いや願いをもって取り組み、試行錯誤しながら考えたり、工夫したりして対象に繰り返しかかわる。この過程を通して得た気づきを表現し、伝え合い交流することで、対象や自分自身に対する気づきを深め、よりよい自分を目指して前向きに生活していく姿をめざしている。

このことは、今回の学習指導要領改訂においても維持されたことから、これからの生活科において、子どもたちが主体的に取り組む具体的な活動の充実と自分のよさや成長を実感させることが重要となってくる。このことが、生活科の究極目標である『自立への基礎』をしっかりと培うことにつながると考える。

そこで前研究では、生活科創設の原点に立ち返り、意欲や自信をもって生活できるようにするためには、「できるようになった自分」「成長した自分」を自覚させることが大切であると考え、これまでの研究を生かしながら学習内容や指導方法の改善を図った。その結果、学習に意欲的に取り組むことができ、自分のよさや成長を自覚する子どもの姿が見られるようになった。しかし、課題として、子ども自身が学習したことを生活の中で生かしている姿に個人差があることが分かった。また、学校教育目標「夢や目標をもち、共にみがき高め合う子ども」に向け、教科としてその具現化に向けて取り組んでいく必要がある。

2 研究の方向

本年度は、これまでの課題を解決し、新しい学校教育目標の具現化を図るために生活科における子ども像を設定するとともに、それに迫る新しい生活科カリキュラムの創造を行っていく。

生活科は、子どもの主体性や自主性の育成を重視している教科であり、教師の活動の見通しと一人一人の児童の的確な把握が必要である。つまり、教師が具体的な活動のイメージをもつとともに、その活動や体験で身に付けさせたい資質や能力をきちんと把握し、指導していくことが大切である。

この見通しの下に、子どもは、対象である人・社会・自然に興味や関心をもって深くかかわり合うことで、対象や自分自身への気づきを深め、活動への成就感や満足感を味わうことができる。さらに、それらの気づきを、他者と伝え合う中で互いのよさに気づき、自分のよさや成長を実感する。それに伴い、子どもの自信や次の活動への意欲を育てていくことができる。このことが自立していくことへの喜びであり、さらには豊かな生活を生み出していくことにつながると考える。

つまり、私たち教師は、子どもの豊かな生活を生み出していくために、対象である人・社会・自然とかかわり合いを深めるカリキュラムを創造していく必要がある。

そこで、次のような研究主題と副題を設定して研究を進めていくことにした。

自立していく喜びを実感する子どもの育成

～人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラムの創造～

II 研究内容

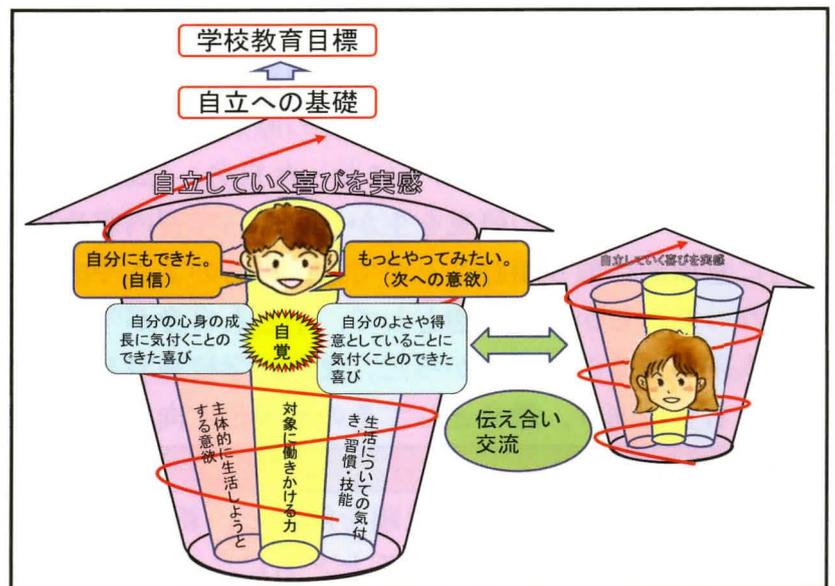
1 自立していく喜びを実感する子どもとは

自立とは、他者とのかかわりの中で、身の回りの環境に進んで働きかけることを通して、豊かな生活を生み出すことである。生活科では、子どもの主体的な活動を大切にし、その活動の結果、子ども自身が自分の行動に対する『自信』を深めることが自立を促すために必要なことである。一つ一つの自信の積み重ねが、様々な意欲につながり、子どもの自立への大切な基盤になっていくと考える。

子どもたちの自信を深めるためには、生活科の学習を通して自分の心身の成長や自分のよさや得意としていることを自覚させることが大切であると考え。それらを自覚することで、自分のよさや得意としていることに気付くことのできた喜びや自分の心身の成長に気付くことのできた喜びなどの自立していく喜びを実感できると考える。

つまり、自立していく喜びを実感する子どもとは、子どもの身近にある対象（人・社会・自然）に主体的にかかわり合うことを通して成就感や満足感を味わい、自分自身への気付きを自覚し、「自分にもできた」「もっとやってみたい」という自信と意欲をもつことのできる子どもである。

このように、自立していく喜びを実感することのできた子どもは、これからの生活科・他教科の授業や実生活において学んだこと



【図1 目指す子ども像】

を生かして、豊かな生活を生み出していくことができると考える。

そのためには、人・社会・自然に対して「不思議だなあ」「やってみたいな」という思いや願いを基に、試行錯誤しながら考えたり、工夫したりしながら、人・社会・自然にかかわることのできる力を培っていくことが大切である。また、活動を通して、自分自身への気付きを深め、生活上必要な習慣・技能を身につけることも必要である。よって、自立していく喜びを実感する子どもを育てるには、表1に示した三つの培いたい力を身に付けさせる必要があると考える。

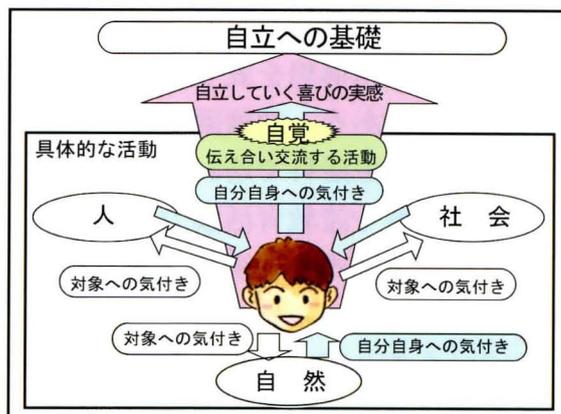
【表1 三つの培いたい力】

主体的に生活しようとする意欲	対象に働きかける力		生活についての気付き、習慣・技能	
	活動における取り組み方	活動についての表現	気付き	習慣・技能
自分なりの思いや願いをもって活動に取り組み、その活動に楽しさや喜びを感じ、よりよい生活を目指していることとする。	身近な人や社会、自然に対して自分の考えや工夫のよさを発揮してかかわることができる。	活動の楽しさや考えたこと、工夫したこと、気付いたことを自分なりの方法で表現することができる。	対象への気付きや対象に映し出される自分のよさや成長に気付くことができる。	生活に必要な習慣・技能を身につけることができる。

このように、友達との学び合いの中で、自立していく喜びを実感した子どもは、よりよい自分を目指し、さらなる夢や目標をもち、意欲的に生活できるようになると考える。このことは、学校教育目標の具現化につながっていると考える。

2 人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラムの創造の基本的な考え方

これまで述べてきたように、自立していく喜びを実感する子どもを育てるためには、身近な人・社会・自然とのかかわり合う具体的な活動を充実させたカリキュラムづくりをしていくことが大切である。なぜなら、図2に示したように人・社会・自然とのかかわり合う活動が充実することで、子どもの対象への気付きも深まり、そこに映し出される自分自身への気付きも明確になってくるからである。さらに、その自分自身への気付きを他者と伝え合い交流し、認め合うことを通して、自分のよさや成長をしっかりと自覚できるようにすることが、自立していく喜びを実感する子どもの育成につながっていると考えるからである。これらの考え方を基に、表2に示した三つの



【図2 人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラム】

の培いたい力から分析した子どもの実態をふまえて、生活科カリキュラムを創造していく。

【表2 三つの培いたい力から分析した実態】

まずは、生活に生かそうとする意欲を高めるまでの子どもの思いや願いの連続性を大切にす

- 生活に生かそうとする意欲の高まりが不十分である。
- 自分自身への気付きまでの高まりが不十分である。
- 習慣・技能の習得に関しては、個人差がある。

る必要がある。そこで、生活科授業の充実を図るとともに、2学期制の特長を生かし、生活科の授業とその他の教育活動を関連させていく。また、具体的な活動の充実を図るために人・社会・自然とのかかわり合う学習内容の見直しや伝え合い交流する活動の位置付けを行っていく。さらに、一層自発的、能動的に対象へかかわれるように習慣・技能面にも着目していく。

そこで、次のようなカリキュラム創造の視点を設定し、カリキュラムの見直しを図る。

視点1・・・2年間を見通し子どものストーリー性（子どもの思いや願いを連続）に着目した年間指導計画の見直し

生活科は、子どもが自らの思いや願いをもち、その実現に向けて主体的に対象に働きかけながら学習するという特質がある。したがって、他教科や道徳教育との関連を図りながら「ゆとりある指導」を行うことが大切となる。つまり、生活に生かそうとする意欲を高めるために、子どもの意識が連続する中で、身に付けさせたい資質や能力が高まっていけるように、弾力的な年間指導計画を作成する。

視点2・・・自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実

3年生以降の学習につながる「科学的な見方・考え方の基礎」を身につけていくことができるように、自然の不思議さや面白さを実感させる学習活動の充実を図る。

視点3・・・伝え合い交流する活動の充実

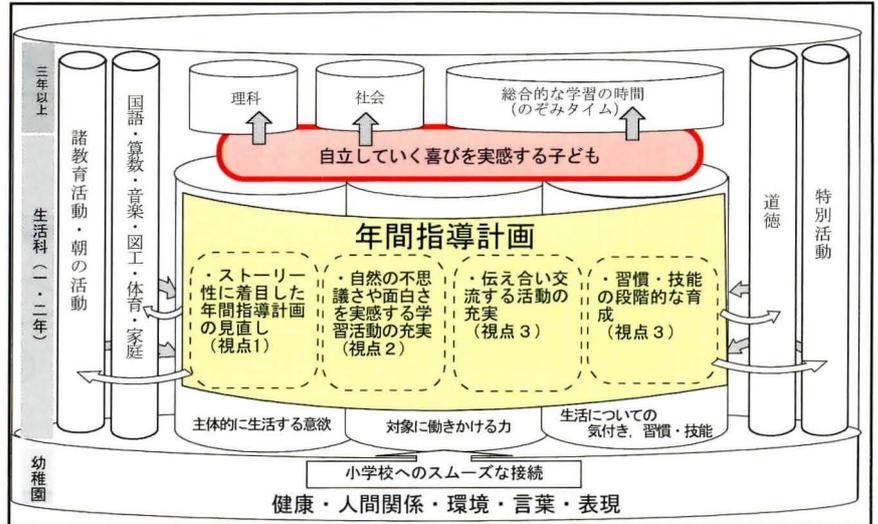
昨年度の研究を基に、互いの自分自身への気付きを明確にしていくためにも、対象への気付きを深めるための伝え合い交流活動を位置付けていく。

視点4・・・生活に必要な習慣・技能の段階的な育成

生活科の活動や体験は、個別的であるため、習慣・技能については、児童一人一人に適切な指導が必要なことから、繰り返し体験できるようなカリキュラムを編成する必要がある。そこで、視点1と関連させながら2年間を見通して、習慣・技能を段階的に育成していく。

3 人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラムの全体構想

カリキュラム創造の視点を基に、人・社会・自然とのかかわり合いを重視したカリキュラムの全体構想を表したものが図3である。幼稚園での学びを基に生活科で培われた力が他教科や諸教育活動で生かされるよう四つの視点を基にカリキュラムの見直しを図っていくことで、設定した子ども像に迫っていくことができる。と考える。



【図3 生活科カリキュラムの全体構想】

(1) 子どものストーリー性（子どもの思いや願いの連続）に着目した年間指導計画の見直し（視点1）

まず、子どもたちが、主体的に活動できるようにするために、活動を通して思考するという低学年の子どもの特性を生かし、自分の思いや願いが連続するように活動を設定していく。そこで、生活科の内容の階層性や子どもの実態に応じて、1年生では、小学校への入学をきっかけとした行動範囲の広がり配慮しながら、活動の広がり配慮を考える。2年生では、1年生での経験を生かし、季節ごとの身近な自然や自然や社会とのふれあいから次の活動を生み出していくようにする。また、学校ライフスタイルの見直しから、生活科の学習が日常生活の中で生かされるよう長期休業中も視野に入れた単元配列を考え、活動の充実につなげていく。

次に、生活科と各教科・道徳等との関連や幼小連携、生活科1・2年における同内容単元の配置で年間指導計画の見直しも行っていく。

さらに、生活科では、「身近な人々や社会とのかかわり」「自分の生活について考える」「生活上必要な習慣・技能を身に付ける」などの過程や体験を通して、道徳的な価値や要素に触れる機会が多い。そこで、道徳的価値や要素を視野に入れ、学習の中で指導したり、生活科の活動や体験をきっかけとして、道徳の時間で効果的に学習できるようにしたりしていく。このようにして、子どもの情意面を豊かにしていくことができる。と考える。そこで、表3に示した生活科の内容と関連する道徳の内容を基に、道徳の内容を関連させながら指導していく。

【表3 生活科の内容と関連する道徳内容一覧】

内容項目	関連する道徳の内容
学校と生活	1-(1)健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする 4-(4)先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする
家庭と生活	2-(1)気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。 4-(3)父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る
地域と生活	4-(1)約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする 4-(5)郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ
公共物・公共施設の利用	
季節の変化と生活	3-(2)身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する
自然や物を使った遊び	3-(3)美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ
動植物の飼育栽培	
生活や出来事の交流	
自分の成長	2-(4)日ごろ世話になっている人々に感謝する 3-(1)生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ

(2) 自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実（視点2）

自然の不思議さや面白さを実感させるためには、遊びを考えたり、遊びに使う物を工夫して作ったりする時間をしっかりと確保することが大切である。その中で、教師が、自然の不思議さや面白さに気付かせるように「比べる」「繰り返す」「試す」などの活動を設定していく必要がある。

比べることで、違いや共通点、あるいは変化に気づき、繰り返すことで、「いつもそうかな」「どうしてそうなるのかな」といった興味や疑問が生まれてくる。また、興味や関心を実行に移して試すことで「いつもこうなる」「今度はこうなる」といった決まりや法則にも気付くことになる。また、こうした体験を通して、自然の美しさや巧みさ、不思議さ、面白さなどを体で感じることで、自然を大切にしている心情も育まれていく。このような体験を充実させることで、自然の不思議さや面白さの実感とともに、3年生以降の学習につながる「科学的な見方・考え方の基礎」を身につけていくことができる。と考える。

そこで、学習の対象となる動・植物、自然事物や現象、季節による様々な自然の変化、身の回りの素材などの子どもに気付かせたい不思議さや面白さを教師自身が事前に把握し、それに関連した指導や支援の方法を考えておくことが大切となってくる。

(3) 伝え合い交流する活動の充実（視点3）

気づきとは、体験を通して個人の中で構成されるものであり、対象とのかかわりによって生まれる関係的なものであり、意欲的な姿を具現する大きな要因である。したがって、活動や体験を繰り返したり、他者とともに活動したりすることで、無自覚なものから自覚された気づきへ、個別の気づきから関連付けられた気づきへ、対象への気づきから自分自身への気づきへと質的に高めていくことが大切である。さらに、この3つの気づきの質の高まりが次の活動や体験の充実につながっていくと考える。

そこで、昨年度の研究では、自分自身への気づきを中心に伝え合い交流する活動を設定したが、互いの自分自身への気づきを明確にしていくためにも、対象への気づきを深めるための伝え合い交流活動を位置付けていく。つまり、3つの気づきの質の高まりの先に述べた2つについては、対象への気づきを中心に、後の1つについては、自分自身への気づきを中心に整理して考えていく。

ア 対象への気づきを深めるために

活動を通して、感じ取ったことや分かったことを表現したり、対象に対して気付いたことや疑問などを伝え合ったりすることが、より対象への気づきを無自覚なものから自覚化された気づきへ、個別の気づきから関連付けられた気づきへ質的に高められると考える。そこで、感じ取ったことや分かったことなどを他者と伝え合い交流する活動や場を設定していく。

イ 自分自身への気づきを深めるために

発達の段階上、自己のよさや成長をとらえにくい低学年の子どもたちに、友達と互いによさや成長を伝え合い交流し認め合ったり、振り返りとらえ直したりすることが、自分自身への気づきを深め、自分のよさや成長を実感することにつながる。そこで、昨年度の研究を生かして、他者のよさや成長を互いに伝え合い交流する活動を位置付けていくようにする。そのためにも、毎時間の簡単な振り返りを表現させるなどして、自分自身への気づきについて交流する際の材料となるようにしていく。

(4) 生活に必要な習慣・技能の段階的な育成（視点4）

生活科において子どもは、身近な環境を対象に、繰り返しかかわる具体的な活動や体験を通して学んでいく。そして、その活動や体験は、個別的である。しかし、学習においては児童一人一人に適切な指導が必要なことから、繰り返し体験できるようなカリキュラムを編成する必要がある。そこで、視点1である子どものストーリー性の重視と関連させながら2年間を見通して、習慣・技能について育成を図っていく。

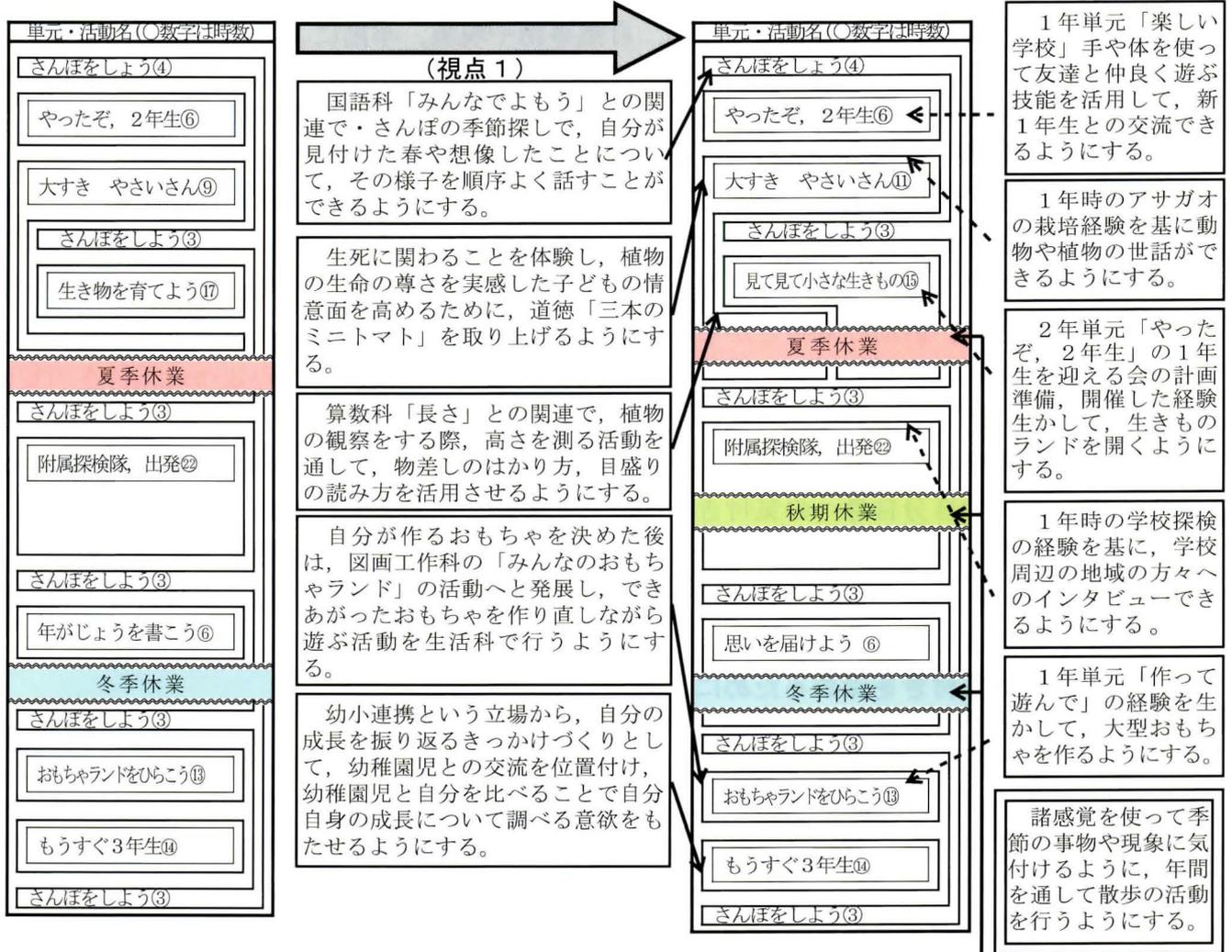
さらに、小学校低学年教育の核として、他教科との関連を図りながら合科的な学習指導も位置付け、習慣・技能の指導も行うことができるようにしていく必要がある。

4 人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラムの具体化

(1) 子どものストーリー性（子どもの思いや願いの連続）に着目した年間指導計画の見直し（視点1）

年間指導計画の具体化にあたっては、これまでの年間指導計画を基にして、カリキュラム創造の視点1から年間指導計画の見直しを行う。これまでの年間指導計画が左下となるが、視点1から考えたとき、右下の配列が妥当であると考えた。視点1・4については、主なものを示すこととする。

【第2学年 生活科 年間指導計画】（視点4）



夏季・秋季・冬季の休業中も生活科で学んだことが、日常生活で活かせるように単元を休業中の前後で設定するようにする。

夏季休業： 「大すきやさいさん」での野菜栽培の経験や「見て見て小さな生きもの」での小さな生きものの飼育の経験を生かして、夏季休業中も家庭での実践期間とする。夏季休業後には、振り返る時間を設定し、友達同士で認め合ったり、教師が称賛したりすることで、自信や意欲をもたせるようにする。

秋季休業： 学校周辺を探検する「附属探検隊、出発」の学習を生かして、自分の家の回りを再度探検させるようにする。広い校区をもつ本校の子どもたちにとって、自分の生活の場である家の周りへの愛着をもたせるようにする。

冬季休業： 休業前の学習を生かし、年賀状を使って思いを届けることができた嬉しさ、もらった嬉しさを実感させるようにする。休業後に、思いを伝えることの大切さについて気付かせるようにする。

(2) 自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実（視点2）

生活科の特質上、一人一人が具体的な活動を行うことから、得られた気付きは素朴なものであり、直観的で主観性が強いと言える。また、発達の段階上、自然事象・社会事象の区別が付けにくいことから、それらを一体的に取り扱うことが大切であり、対象にかかわる中で、試行錯誤や繰り返しを大切にし、その過程を重視することが必要である。

そこで、具体的には、下記のこと留意していく。

- 十分に対象と触れ、体験する環境を作る。(じっくり・ゆっくり・たっぷり)

- その中で、対象のよさや面白さ、不思議さなどに気付かせるような下記の問いかけをする。
「同じところは」、「違うところは」、「どっちの仲間」、「比べてみたら」「どうしてそうなったのかな」
- 自然の美しさや巧みさ、不思議さ面白さなどを体で感じることができるようするために、子どもと関係の深い動植物、自然の事物や現象、季節による様々な自然の変化などのかかわりを深めるようにしていく。

これらのことを具体的に示すと次のようなことである。

春のさんぽで何気なく道ばたの石を触った子どもに、初夏のさんぽで、自然の不思議さに気付くように「春は、冷たかったけど、石は同じかな。比べてみたら」と問いかけることで、石の温かさの違いに気付くはずである。さらに「どうしてそうなったのかな」と問いかけることで、温かくなった理由をこれまでの体験を基に考え始める。さらに冬のさんぽで、自ら石を触り始め、「あれ、冷たいぞ」と体で感じることで、日光の力の不思議さに気付くはずである。さらに、「春になるとどうかな」と繰り返す中で、「いつもこうなる」「今度はこうなる」といった規則性に気付くことにつながる。

(3) 伝え合い交流する活動の充実（視点3）

ア 対象への気付きを深めるために

子どもは、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動を行いながら、気付きを比較したり、分類したり、関連付けたりして、より質の高い気付きを生み出していく。そのためにも、子ども自ら対象への気付きを振り返ったり、互いの気付きや感じたこと考えたことなどを交流したりするような活動を充実させていく。

【具体例】第2学年単元「大すき やさいさん」において、野菜の生長を観察することを通して気付いたことを友達と情報交換させる。その際、実際に友達の野菜も諸感覚を使って観察させることで、自分の野菜との違いを見付けたり、比べたりさせるようにする。また、それらのことを、表現できるよう観察カードにまとめたり、紹介したりする時間を設定するようにしていく。

イ 自分自身への気付きを深めるために

自分自身への気付きを深めるためには、互いのよさや成長を伝え合い交流し合うことで、互いに認めたり、共感したりして、自分のよさや成長を自覚させる必要がある。そこで昨年度研究で作成した交流設定の基本的な考え方を基に充実させていく。

また、互いに言葉などを使って伝え合い交流することは、自分自身への気付きを深めるだけでなく、互いの思考を促し、他者とのコミュニケーションを成立させ、よりよい人間関係をはぐくむことができるとも考える。

【具体例】第1学年単元「家族大好き大作戦」において、家庭での実践の取り組みを表現させ、保護者を招いての発表会を開く。その中で、保護者の方には感想カード、子どもには、すごいなカードややってみたいなカード等を記入して、その子自身に手渡すようにして自信や意欲につながるようにしていく。

(4) 生活に必要な習慣・技能の段階的な育成（視点4）

子どもたちは、身近な環境を対象に、繰り返しかかわる具体的な活動や体験を通して学んでいく。そして、その活動や体験は、個別的である。しかし、学習においては児童一人一人に適切な指導が必要なことから、繰り返し経験できるようにカリキュラムを編成する必要がある。そこで、視点1である子どものストーリー性の重視と関連させながら2年間を見通して、単元ごとの習慣・技能について段階的に繰り返し育成を図っていく。さらに他教科との関連を図りながら年間指導計画上に位置付けるようにしていく。

【具体例】 第1学年単元「楽しい学校」→先生方へのインタビューの仕方を知る。

お店の人には、まず、挨拶をしないとね。

活用

学校探検でインタビューしたよ。

第2学年単元「ふぞくたんけんたい、出発」→地域の方々へのインタビューの仕方を知る。

Ⅲ 研究の実際

1 実践の立場

本実践は、第1学年「つくって あそんで」の単元における実践を通して、「人・社会・自然とのかかわり合いを重視した生活科カリキュラム」の有効性を検証するものである。また、実践の検証の仕方としては、授業中の子どもの活動や発言、ワークシート等から評価・分析することとした。

前述したカリキュラム創造の視点を基に作成した第1学年の年間指導計画を次項に示した。また、本単元における具体化については、以下のように考え、実践を行った。

視点1	子どものストーリー性(子どもの思いや願いの連続)に着目した年間指導計画の見直し
○	<p>冬季休業を活用した長期的な単元作り 冬季休業前に、冬の遊びやお正月遊びをして、冬季休業にどんな遊びをしてみたいか話し合う時間を設定し、長期休業中の活動が充実するようにする。また、冬季休業後には、冬季休業中にした遊びを基におもちゃ作りへの思いや願いを高めるようにする。</p> <p>○ 1・2年で同時期に同内容の単元配置による2年生との交流 「もっと、面白いおもちゃを作りたい。」という意欲を高めたり、持続させたりするために、おもちゃ作りという共通の活動である2年生の「おもちゃランドをひらこう」と同時期に設定し、互いに交流できるようにする。</p> <p>○ 道徳の時間との関連 本単元では、習得させたい習慣・技能に『道具や材料の正しい使い方と片付け』がある。この指導内容を道徳の時間と関連させて指導を行う。道徳の授業で、生活科の中での子どもの姿を取り上げ、資料<おもちゃのかいぎ(学研)>を基に、自分で使った物は自分で片付けることの大切さについて考えさせるようにする。</p>
視点2	自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実
○	<p>自然の不思議さや面白さを実感できるおもちゃの選定 子どもの実態や本単元で扱う空気・磁石・ゴム・音の不思議さや面白さを実感できること、条件を変えて試したり、繰り返したりすることができることなどから、下記のおもちゃを扱うようにする。 空気：空気砲 磁石：魚釣り ゴム：ゴムロケット 音：缶笛</p>
視点3	伝え合い交流する活動の充実
ア	<p>対象への気付きを深めるための活動の充実 自然の力を使ったおもちゃ作りを、繰り返したり、試行錯誤したりしながら十分かかわった後に、活動を通して気付いたことや分かったことなどを交流する時間を設定する。そのために、毎時間、工夫したことや気付いたことなどをワークシートに書きためておくようにする。そして、同じおもちゃを作っているグループ内や、学級全体で交流し合い、無自覚的な気付きを自覚された気付きへ、個の気付きを関連付けたれた気付きへと質的に高めるようにしていく。</p> <p>イ 自分自身への気付きを深めるための交流設定 昨年度作成した交流設定を基に、互いの気付きを伝え合い、互いのよさや成長を認め合う活動を設定し、自分自身への気付きを深めるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「これからの活動について話し合う活動」として、冬やお正月の遊びを通して、その遊びの面白さについて発表し合い、今後の活動について話し合うようにする。 ・ 「教え合う活動」や「話し合う活動」として、同じおもちゃを作るグループの中で交流が生まれるようにする。 ・ 「認め合う活動」として、自分が作ったおもちゃを友達と互いに紹介し合い、これまでの取り組み方のよさを認め、称賛し合うようにする。
視点4	生活に必要な習慣・技能の段階的な育成
○	<p>習得させたい習慣・技能の重点化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 互いにゆずり合いながら、仲良くおもちゃを作ったり遊んだりすることができる。 ・ 道具や材料を、安全に気を付けて正しく使い、片付けをすることができる。

2 生活科 第1学年 年間指導計画

視点を基に、以下のような年間指導計画を作成した。

(視点1)

幼小連携の観点から、小学校生活へのスムーズな接続を図るために、「友達との遊び」「学校探検」「アサガオの栽培」の活動を大単元で構成する。また、国語科「たんけんしたよ、みつけたよ」、算数科「10までのかず」、体育科「こてししせつあそび」、図工科「ようこそすなのくにへ」と関連を図るようにする。

さらに、安心して学校生活を送ることができように、2年単元「やったぞ2年生」と関連をもたせ、1・2年生の交流を設定する。

生き物に対して親しみをもち、優しい心で接することができるように、道徳の時間「わたしはもんしろちょう」と関連を図るようにする。

秋の素材の特徴を生かして、作ったり遊んだりすることができるように、図工科「お山のおまつり」との関連を図るようにする。

1年間の自分の成長に気付くことができるように、幼稚園児との交流を位置付けたり、1年間の生活を振り返る活動を設定する。

1年間を振り返ったことを、絵や文で表現することができるように、国語科「いいこといっぱい、1年生」との関連を図るようにする。

月	単元・活動名<○数字は時数>
4	たのしいがっこう(21) ・学校探検をしよう(校庭, 教室)③ ・友達をたくさん作ろう③<2年合同> ・学校探検をしよう(校舎内)⑩ ・きれいな花を咲かせよう②
5	みんなであそぼう(18) ・さんぽに出かけよう③ ・友達と遊ぼう④ ・公園で遊ぼう⑩ ・もうすぐ夏休み①
6	夏季休業
7	種が採れたよ③
8	いきものとなかよし(8) ・生き物探検をしよう① ・ウサギやにわとりと遊ぼう④ ・動物ふれあい大作戦③
9	木のみ・木のほととだち(15) ・散歩に出かけよう②
10	秋季休業
11	木の実・木の葉で遊ぼう③ ・木の実・木の葉を集めよう② ・木の実・木の葉を使って作ろう⑥ ・作った物で遊ぼう②
12	かぞく大すき大さくせん(9) ・楽しい思い出を発表しよう① ・家族のことを調べて紹介しよう③ ・お手伝い大作戦をしよう③
1	つくって あそんで(17) ・冬の遊びやお正月の遊びをしよう③
2	冬季休業
3	・できるようになったことを発表しよう② ・いろいろなおもちゃで遊ぼう③ ・おもちゃを作って遊ぼう⑦ ・2年生と一緒に遊ぼう②<2年合同> ・楽しかったことを伝えよう②
3	もうすぐ2年生(14) ・さんぽに出かけよう② ・幼稚園に行く計画を立てよう② ・幼稚園で遊ぼう② ・もう一度幼稚園に出かけよう③ ・1年生を迎える準備をしよう③ ・がんばったことを発表しよう②

(視点4)

生活科の学習などを通して、基本的な生活習慣を身に付けることができるようにする。
【例】あいさつ・言葉遣い・トイレ・廊下歩行・整理整頓・友達と仲良く遊ぶ・生き物の世話など

(視点2)

生き物の不思議さや生命の大切さを実感できるように、動物に直接触れたり、お世話をしたりする活動を設定する。

(視点4)

作って遊ぶ活動では、道具の適切な使い方や片付けの仕方について、繰り返し指導を行うようにする。

(視点3)

自分自身への気付きを深めるために、家庭でのお手伝い大作戦の発表は、保護者の方を招いて行い、保護者に称賛してもらうようにする。

(視点2)

自然の不思議さや面白さを実感できるように、ゴムや磁石、空気や音など自然事象を利用したおもちゃの製作や遊びを設定する。

(視点3)

全単元において、下記のことを重点化していく。
ア 対象への気付きを深めるための「見付ける」「比べる」「たとえる」などの多様な学習活動を設定する。
イ 自分自身への気付きを深めるために、交流設定を基に、互いのよさや成長を伝え合い交流する活動を設定する。

夏季・秋季・冬季の休み中も生活科で学んだことが、日常生活で活かせるように単元を休業中の前後で設定するようにする。

夏季休業： 休業前に学習したアサガオの観察や世話の仕方を活用する場として活用し、家庭生活においても、主体的、継続的に活動することができるようにする。そして、休業後には、それまでの自分の活動を振り返り、自分自身の取り組み方のよさや成長を実感させるようにする。

秋季休業： 休業前に、秋の木の実や木の葉を使った遊びを紹介し、それらを基に、休業中は、家庭で地域に出かけ思い思いに作ったり遊んだりする場として活用する。そして、休業後は、休業中に作ったものや遊んだことを紹介させ、遊びを生かした学習ができるようにする。

冬季休業： 休業前に「つくって あそんで」の単元の導入として、冬の遊びやお正月遊びをする時間を設定し、自分がやってみたい遊びや、作ってみたいものを製作する場として活用する。そして、休業後は、家庭で遊んだり作ったりしたことを紹介したり、友達の作ったもので遊んだりして、活動が広がるようにする。

また、「かぞく大すき大さくせん」では、休業前に設定したお手伝い大作戦の実践の場として活用し、活動期間を十分にとり、より満足感や達成感を高めることができるようにする。そして、休業後には、家庭でのお手伝い大作戦の発表会を設定することで、自分自身への気付きを深め、自信や意欲をもたせるようにする。

3 実践の結果と考察 第1学年単元「つくって あそんで」

以上のことを踏まえて、三つの培いたい力の観点から、本単元の目標を設定した。

(1) 単元の目標

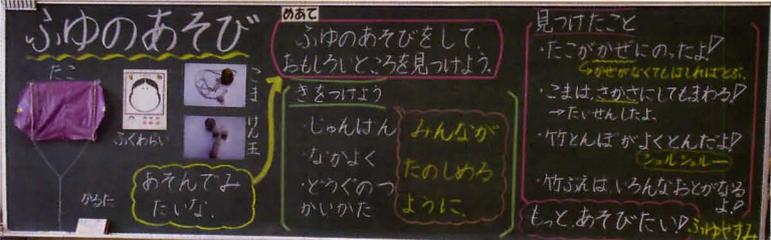
ア 「おもちゃで楽しく遊びたい。」「工夫した楽しいおもちゃを作りたい。」というような思いや願いをもって、正月遊びを楽しんだり、自然事象を利用したおもちゃを作って遊んだりする活動に、意欲的に取り組むことができる。 【主体的に生活しようとする意欲】

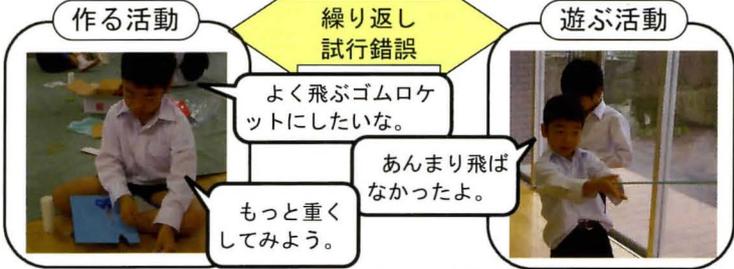
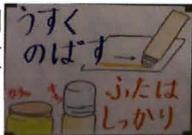
イ 自分なりにおもちゃの作り方や遊び方を工夫したり、友達のおもちゃと比べたりしながら、考えたおもちゃを作ったり、遊んだりすることができる。 【対象に働きかける力】

ウ 自然事象を利用したおもちゃのよさや作り方、楽しい遊び方に気付くと共に、正しい道具の使い方などを身につけることができる。また、活動を通して、自分のよさや成長に気付くことができる。 【生活についての気付き、習慣・技能】

(2) 実践の結果

 は子どもの思いや願い

過程	主な学習活動と子どもの活動の様相	教師の具体的な働きかけ																
意欲を	<p>1 冬の遊びやお正月遊びをしよう③</p> <p>(1) 冬季休業やお正月にどんな遊びができそうか話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 僕は、こままわしをやってみたいな。 ・ 私は、かるたをしたいから、かるたを持ってくるね。 <p>(2) 自分がやってみたい冬の遊びやお正月遊びをする。</p> <p><活動の分布></p> <table border="1"> <tr><td>こままわし</td><td>9人</td></tr> <tr><td>はねつき</td><td>6人</td></tr> <tr><td>福笑い</td><td>6人</td></tr> <tr><td>たこ上げ</td><td>5人</td></tr> <tr><td>おはじき</td><td>4人</td></tr> <tr><td>すごろく</td><td>4人</td></tr> <tr><td>カルタ</td><td>4人</td></tr> <tr><td>けん玉</td><td>2人</td></tr> </table>  <p>【福笑いやすごろくで遊ぶ様子】</p>	こままわし	9人	はねつき	6人	福笑い	6人	たこ上げ	5人	おはじき	4人	すごろく	4人	カルタ	4人	けん玉	2人	<ul style="list-style-type: none"> ○ 季節や子どもの生活から今後の学習へと連続・発展していくようにするために、冬やお正月の遊びについて話し合い、子どもの思いや願いを高めていくようにした。 《視点1・3》 ○ 自分たちが準備した遊び道具を使って、思い思いに活動させる。その際、友達と遊ぶときに気を付けることを問いかけ、遊びに必要な習慣・技能を確認させるようにした。(板書の写真の中央) 《視点4》 ○ 活動中は、子どもの遊びの中に入り、その遊びの楽しいところや、もっと、楽しくするにはどうしたらよいかなど、問いかけたり、子どもの活動を価値付けたりした。 《視点3》
こままわし	9人																	
はねつき	6人																	
福笑い	6人																	
たこ上げ	5人																	
おはじき	4人																	
すごろく	4人																	
カルタ	4人																	
けん玉	2人																	
も	<p>・ お正月遊びや冬の遊びも楽しいね。</p> <p>・ 冬休みに、もっといろいろな遊びをしてみたいな。</p>  <p>【第2・3時の板書例】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の学習を通して、その遊びの面白さや、こうやって遊ぶと面白いということを発表させ、「もっと、冬休みにやってみたいな。」という意欲をもたせるようにした。(板書の写真の右側) 《視点1》 																
つ	<p>冬季休業(家庭での実践)</p>																	
活動する	<p>2 いろいろなおもちゃで遊ぼう③</p> <p>(1) 冬季休業にした遊びや作ったおもちゃを紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達もいろいろな遊びを工夫しているんだね。 ・ 友達が作ったおもちゃで遊んでみたいな。 <p>(2) 友達に紹介されたおもちゃで遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達が作ったたこをみんなで飛ばしたよ。 ・ ぼくも作ってみたいな。  <p>【水を使ったおもちゃの紹介】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ おもちゃ作りに対する興味・関心を高めるために、自分が冬季休業中に作ったおもちゃや、その面白さを紹介させるようにした。 《視点3》 ○ 子どもが作った工作から、特に、水や空気など自然の力を利用してしているものを取り上げることで、その面白さを感じさせるようにした。 《視点2》 																

過程	主な学習活動と子どもの活動の様相	教師の具体的な働きかけ
活動	<p>3 おもちゃを作ってあそぼう⑦</p> <p>(1) 教師が紹介したおもちゃの中から、作ってみたいものを遊びながら選び、必要な道具や材料を考えてワークシートに書く。</p> <p>空気：空気砲(2) 磁石：魚釣り(2) ゴム：ゴムロケット(27) 音：缶笛(5)</p> <p>・面白そうだな。僕はゴムロケットを作ってみたい。 ・私は、缶笛を作って、曲を作ってみたいな。</p> <p>(2) 自分の計画をもとに、おもちゃを作って遊ぶ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; border-radius: 10px;">作る活動</div> <div style="text-align: center;"> <p>繰り返し 試行錯誤</p>  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; border-radius: 10px;">遊ぶ活動</div> </div> <p>よく飛ぶゴムロケットにしたいな。 あんまり飛ばなかったよ。 もっと重くしてみよう。</p> <p>・ゴムロケットに針金を付けて、重くしたらよく飛ぶようになったよ。 ・缶笛の中に水を入れたら音が変わるよ。不思議だな。 ・魚がつれるとうれしいな。もっといろんな魚を作ろう。 ・空気砲で的当てゲームをしたよ。</p>	<p>○ 自然の事物・現象を生かしたおもちゃ作りに関心をもたせるようにするために、予め教師が作っておき、子どもたちに紹介した。その際、繰り返したり、試行錯誤したりする活動が生まれるようなおもちゃを選定した。《視点2》</p> <p>○ 自然の面白さや不思議さを実感できるように、「もっと高く飛ばすには、どうするの?」など、条件を変えて活動するような問いかけを行うようにした。《視点2》</p> <p>○ 常に、道具の使い方などについて意識できるようにするために、道具の使い方に関する貼り絵を黒板に貼っておくようにした。</p>  <p>また、活動の振り返りの際も、振り返りの視点として活用し、自分自身のよさや成長への気付きとして高めるようにした。《視点4》</p>
す	<p>4 2年生と一緒におもちゃで遊ぼう②</p> <p>(1) 2年生のおもちゃランドで、一緒に遊ぶ。</p> <p>・2年生の工夫はすごいな。 ・もっとおもちゃを作りたいな。</p>  <p>【交流の様子】</p>	<p>○ 自分のおもちゃ作りに生かせるように、2年生のおもちゃのすごいなと思ったところやまねしたいと思ったところを2年生への手紙として発表させ、互いに伝え合うようにした。《視点3》</p>
る	<p>道徳の時間との関連 <主題名：ものを大切にする心 資料名：おもちゃのかいぎ(学研)></p> <p>道具や材料を大切に使う態度を養うために、生活科の時間に片付けができなかった場面を取り上げ、資料を基に授業を行った。</p> <p>《視点1・3》</p> <p>・ものに対して、思いやりやさしさが必要なんだね ・片付けると、みんなの気持ちがよくなるね。</p> <p>(3) 2年生との交流を生かして、自然を使ったいろいろなおもちゃを作って遊ぶ。</p> <p>UFO キャッチャー(11) 空気砲(4) 吹き矢(4) 缶笛(4) パチンコ(3) ゴム鉄砲(3) ゴムロケット(2) 風で走る車(2) ギター(2) マスカラ(2) ぷかぷかボール(1) 紙コプター(1) 風車(1) 魚釣り(1)</p> <p>・私は、2年生から教えてもらった吹き矢を作ったよ。 ・図鑑で見た、ぷかぷかボールを作ったよ。</p>	<p>○ 4種類のおもちゃ以外に、2年生から教えてもらったものや、図鑑などを使って自分で調べたものなど、おもちゃ作りに広がりが出るよう話し合った。</p> <p>《視点1》</p>  <p>【ぷかぷかボール】</p>
振り返る	<p>5 楽しかったことを伝えよう②</p> <p>(1) できたおもちゃをみんなに紹介し、楽しかったこととできるようになったことなどを発表し合う。</p> <p>・いろんなおもちゃ作って、とっても楽しかったよ。 ・もっと、楽しいおもちゃを作ってみたいな。</p>	<p>○ 自分のよさや成長を自覚させるために、おもちゃを紹介し合うようにした。また、楽しかったこととできるようになったことなどを発表し合い、互いのよさを見付け伝え合うようにした。《視点3》</p>

(2) 実践の考察（成果と課題）

ア 子どものストーリー性(子どもの思いや願いの連続)に着目した年間指導計画の見直し

- 道徳の時間との関連を図ることで、道具等の適切な使い方の大切さに気付き、進んで片付ける姿も見られるようになった。
- 右の写真のように、休み時間に、学習したことを生かして遊ぶ子どもが増えた。
- 2年生との交流を設定したことで、子どもの活動を広げることができた。さらに、「いろいろなおもちゃを作りたい。」という意欲を高めることができた。



【休み時間に活動する姿】

- 子ども一人一人の思いや願いが連続するような、個に対応した授業づくりをより充実させていく必要がある。

イ 自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実について

- 自然の事物・現象を生かして遊んでいることに気付かせることで、自然の事物・現象に興味・関心をもち、その面白さや不思議さを実感することができた。
- さらに、自然の不思議さや面白さを実感できる教材の選定と開発を進める必要がある。

ウ 伝え合い交流する活動の充実について

- 互いに気付きを表現し、相手に伝えることで、気付きの質を高めることができた。
- 活動できたことを紹介し合い、互いに認め合うことで、活動への満足感や成就感を高め、自分自身のよさや成長を実感することができた。

エ 生活に必要な習慣・技能を段階的に身に付けることについて

- 身に付けさせたい習慣・技能を明確にもち、貼り絵などを使って繰り返し指導を行うことで、道具の使い方や片付けへの意識が高まってきた。
- 他の単元についても、身に付けさせたい習慣・技能を明確にした実践を重ね、検証を進めていく必要がある。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 目指す子ども像を具現化するために人・社会・自然とのかかわりを重視した生活科カリキュラム創造の考え方を明らかにできた。
- 生活科カリキュラム創造の考え方を基に、年間指導計画を作成することができた。
- 自然の不思議さや面白さを実感させる学習内容の充実を図ったことで、子どもたちが、より身近な自然に主体的にかかわるような姿を生み出すことができた。
- カリキュラムの全体像を構想することで、子どもの経験の連続性や発展性を把握することができ、より重点的な指導を行うことができた。

2 研究の課題

- 子どものストーリー性に着目した他教科・道徳・諸教育的活動、幼小連携、生活科1・2年における同内容単元の配置について、学校教育課程との関連で充実させていく必要がある。
- カリキュラムの視点をより具体化した学習指導の在り方を明らかにして、授業を充実させていく必要がある。

《参考文献》

- | | | |
|---------|-------------------------|----------------|
| ○ 文部科学省 | 「小学校学習指導要領解説 生活編」 | (日本文教出版 平成20年) |
| ○ 中野重人著 | 「生活科教育の理論と方法」 | (東洋館 1990年) |
| ○ 田村 学著 | 「今日的学力をつくる 新しい生活科授業づくり」 | (明治図書 2009年) |
| ○ 木村吉彦著 | 「気付きの質を高める生活科12ヶ月」 | (学校図書 2008年) |
| ○ 野田敦敬著 | 「小学校学習指導要領の解説と展開 生活編」 | (教育出版 2008年) |
| ○ 寺尾慎一著 | 「平成20年度改訂小学校教育課程講座 生活」 | (ぎょうせい 2008年) |